

平成26年度
第3回 徳島県いじめ問題等対策審議会 議事録

- 日 時 平成27年1月6日(火) 10時から正午
- 場 所 県庁 10階 特別大会議室
- 出席者 14名(1名欠席)
- 会議概要

- 1 開会
- 2 (1)教育委員会あいさつ
(2)会長あいさつ
- 3 協議
(1)「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果について
- 4 閉会

協議内容

【事務局】

- ・平成26年度 第1回徳島県いじめ問題調査委員会(6月18日実施)報告
- ・平成26年度 第2回徳島県いじめ問題等対策審議会(9月2日実施)報告
- ・平成26年度 第2回徳島県いじめ問題等対策連絡協議会(9月24日実施)報告

【会長】

教育委員会と各関係機関とをつなぐ「協議会」。教育委員会の附属機関であるこの「審議会」。そして知事部局の「調査委員会」がある。事前に配布されていた(資料2)は、知事の率直な意見が読み取れる大変興味深いものである。『いじめを見つけた学校は悪い学校ではない』。早期発見、早期対応をきちんとすることが大事であると言われている。

弁護士さんから学校に対する厳しい意見もあるということも理解し、読んで欲しい。続いて検討部会の部会長から「第1回いじめ問題等対策検討部会」の報告がある。

【検討部会長】

- ・平成26年度 第1回いじめ問題等対策検討部会(12月15日実施)報告

【会長】

審議会や協議会での審議内容や提言を最前線で反映しようとしている。このようにいろいろな会が審議会を中心に動いている。

それでは「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」について審議いただくわけだが、平成25年度から通信制も調査に含めているのはどうしてか。

【事務局】

この調査は毎年、文部科学省が実施している。昨年度分から暴力行為件数と高校生の中途退学者数に通信制も入れるよう指示があったからである。そのため数値的には簡単に経年比較できなくなった。

【会長】

調査範囲が広がったということであるが、本県については数値が大きく変化していないことがわかる。

では「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について」の資料を見ていただいて率直な意見をお願いしたい。

【委員】

文部科学省が行っているこの調査は、年度を追うことで傾向がわかるものである。いじめの認知件数が増えているということだが、いじめの芽を早く見つけることが素早い解決につながる。小さな事でも職員と情報を共有して対応することで認知件数が増える。増えたからどうこうではなく、認知し、どのように解決していくかが大事である。

不登校の児童生徒数の詳しい数字がわかれば教えて欲しい。本県の場合、平成22年度がピークで1000人あたりの数は全国を上回っていた。私が気になるのは小学校と中学校の大きなひらきである。例えば小学校6年で何人、中学校1年生で何人といった数字が知りたい。

【事務局】

小学6年生が37件。中学1年生が105件となっている。中1で一気に増えることがわかる。傾向は徳島県も全国の数値もよく似ている。

【委員】

今、紹介された数字は、およそ3倍の違いがある。これは昔から「中1ギャップ」と総称される特徴的なものである。この「中1ギャップ」への適切な対応について不登校という視点で話をしたい。かつて平成23年度に県教委が作成した「段階別不登校対応ハンドブック」(以下ハンドブック)が各学校には配布されている。このハンドブックを活用し、不登校の対応をし

ている。中1での不登校をなくすための取組を2つ紹介する。

1つ目は不登校の未然防止という観点からである。学校種別の違いは小学校と中学校では大きく違っており、その違いを克服して円滑な中学校への進学を実現するため、各中学校では校区内の小学校と連携している。例えば中学校のオープンスクールに小学生を招いたり、中学校独特の教科「英語」「数学」の教員が小学校に出向き出張授業をしたり、例えば避難訓練といった学校行事を小中合同で行い、中学校に慣れてもらう工夫をしている。また、中学校に上がる段階で小6の子が抱えているいろいろな心配事を事前にアンケートして、それに対して中学生が答えて小6の子に伝えることで入学前のハードルをできるだけ下げておく。

2つ目の取組としては、不登校の初期段階での指導にも力を入れて行っている。不登校の子どもは不登校が続くと家からも出られない、部屋からも出られないという状況にもなる。初期対応は極めて重要で、ハンドブックにも曖昧な理由で3日休むと対応すると書かれている。しかもその対応は学級担任一人で対応するのではなくチームで対応するとも書かれている。とても大切なことだ。その対応を初期ですることにより不登校が深みにはまらずに学校へ来られるようになる。この2つが中学校で行っていることである。

先に言った1つ目の取組ということで、中学校入学前の子どもたちは、中学校に対する憧れ・希望がある反面、不安とか心配事もある。そのハードルは結構高い。私も校区の小学校で行ったアンケートを見てよくわかった。

2つ目に言った初期段階での対応について、今年力を入れて行っているのが、チームでの対応である。このチームに専門家に入ってもらうことで効果が出ている。中学校にはスクールカウンセラーが配置され、週1日来てもらっている。子どもたちの様子を見て、子どもたちの話を聞いてもらって、対応してもらっていることでチームの幅が大きく広がっている。

子どもたちの問題行動の背景を考えたとき、家庭の経済的要因が結構ある。そういうことから考えると、子どもたちの問題行動を解決するためには専門的な知識を持っている方に入っていただいて関わっていくことが大事である。例えばこの審議会にも、それぞれの専門家が入っているが、学校にもスクールカウンセラー・臨床心理士に来てもらっている。経済的な側面の対応ということで社会福祉士に学校へ来てもらう。このような専門的な方に日常的に入って頂いてチームがますます子どもたちへ対応できればと思う。それがひいては不登校を減らす。またいじめも減らす。問題行動全般に効果を発揮すると思う。

【委員】

(資料1)の暴力行為の件数について、中学校の件数を見ると平成24、25年とほとんど変わっていない。この数値は24市町村全部を足した数字であり、徳島市の数字は暴力行為だけで24年度が67件、25年度には111件と増えている。原因を調べたところ、3、4校の特定の生徒が、繰り返し暴力行為を行った状況があった。いじめや暴力行為については以前から教師の指導資料や保護者へのリーフレット等作成して取り組んできた。こういう数字を見て危機感を持っている。

子どもたち自身の中で話し合いをしてスローガンを決めて自ら暴力行為やいじめ問題を子どもたち自身がしっかりと対応していけるような力をつけていかなければいけない。教師の研修会、保護者への働きかけを同時進行で行い、子どもたちの仲間づくり、道徳や他の指導を通して子どもたちが自分たちで解決していけるような組織を作っていかなければいけないと考え、来年度「いじめ防止対策等推進子ども会議」という各中学校から子どもたちの代表を集め、子ども会議を通してリーダーの養成並びに成果をそれぞれの学校に持ち帰って、しっかりと子どもたちの中で暴力行為やいじめ問題に取り組めるような組織を作っていこうと計画している。

もう1点は、小中学校の不登校児童生徒数の推移である。徳島市では平成23年度229件、24年度211件、25年度180件と確実に減りつつある。ここ10年くらい徳島市は小中学校の児童生徒数は全国や県の平均と比較するとかなり高かったが、それぞれの小中学校を中心に不登校対策に取り組んだ。特にQ-Uのアンケートを中心に楽しい学校、登校しやすい学校づくりを目ざして取り組んだ結果、かなり減ってきている。

NHKが、10年おきに中学生の生活調査をしている。その数字を見ると、日本全国の中学生の生活状況等の調査の中で中学校に行くのが楽しいかどうかという質問がある。5段階(とても楽しい・楽しい・普通・あまり楽しくない・まったく楽しくない)で40年前と比較すると、とても楽しいという数が変わってきている。確か2012年の数字では半数を超えてとても楽しいという数字が上がっていた。全体的には小中学校のきめ細かな取組の成果が全体として出ているのではないかと思っている。ただ個別に数字を拾うと学校によっては心配な数字も出ていたりする。引き続き教育委員会と学校が協力して不登校・問題行動を少なくしていきたい。

【会長】

調査は微妙なものである。1人の子どもが暴力をふるうと「1」になる。次の日、同じ生徒がまた暴力をふるうと「2」となり、その生徒が、年間50回暴力をふるうと50となる。これが現実である。そのため言われたように数字が上がると驚くかも知れないが、それが調査である。そういった中で一つの傾向を見ながら次にステップしていくことは重要である。

【委員】

小学校と中学校の両方を経験した者として話をする。今は1学年1学級の小さな学校なので、

昨年は保健室登校をする子がいたが、本年度は不登校児童はいない。暴力行為等もあるが、中学校とは比較にならない。しかしいじめの調査は（資料1）の通りで児童も保護者も敏感になっている。少子化もあり、子ども同士で解決できそうなことにも保護者が過敏に反応することがある。小学校と中学校の認知件数が変わらないのは、そういった理由であると感じた。先生たちにも言うが、いろいろなSOSを受け止めることが大事と思っている。小学校低学年であれば、ちょっとしたことがあっただけで、学校が好きになったり嫌いになったりする。そういうこともあるので子どものメッセージを受け止めることが大切と思いアンケートも実施している。

私が特に気になるのは、「不登校」である。子どものストレス耐性が低い、小学校はみんなで大事にしている。何かあったらみんなで対応している。しかし、5、6年生には「中学校ではこんな感じではないよ」とよく言っている。子どもはストレスがあまりかからない中で育っているが、中学では教科毎で順位がつく。他の小学校の子たちと一緒にになり、人間関係を構築していかなければいけない。教科担任制でいろいろな先生と出会う。一番厳しいと思うのは部活動と学業との両立。部活動での人間関係もある。保護者は高校進学があって勉強に対し厳しくなるという状況もある。

私が送り出した子の中で、まさかこの子という子が中学校になって不登校になった。中学校が対応してくれていないわけではなく、小学校の時にストレス耐性を高められなかったのかと思った。逆にこの子大丈夫かなと思っていた子が、県立の中学校に行くことで環境が変わり、元気に学校に行っている子もいる。

私は子どもたちを「強く、たくましく、頼もしく育てたい」と思っている。だからいじめのアンケートでいろいろ出てきてもすべて聞いて、知っていなければいけないが、「教師が全て解決してはダメだ」と言っている。教師は知っているから大丈夫。自分たちでやっていけるところまでは頑張らせようと学校全体で取り組んでいる。

暴力行為については、ADHDの児童で薬を飲むと落ち着く子もいるし、薬に頼るとぐったりとなってしまう子もいる。薬に頼らない支援についても研修が必要。自閉症スペクトラムの児童のなかに心の機微が読めないの、こういうふうには答えれば相手が傷つくことがわからないためにトラブルになる例もある。中学校で問題行動を起こさないために、とにかく「学校は味方だ。学校の先生は信頼できるんだ。保護者にも先生は、味方だよ」と信頼関係を築き、中学校へ送り出す。中学校での暴力行為未然防止につながっていく。何かあっても先生に相談したら大丈夫ということ伝えていきたい。そういった意味で小学校教育はとても大事と考えている。

【委員】

いじめ認知件数が、25年度は24年度に比べ減っている。暴力行為件数や不登校生徒数は変わっていないように思った。また、不登校になったきっかけで考えられる状況で「いじめ」によるものというのがどのくらいあったか知りたいと思った。高等学校中途退学者数は250名以上いるが、進学や就職希望でないその他の人はどうしているのか気になった。フリースクールや大学検定等を受け、新しい目標に向かっていけばいいのだが、不登校からひきこもりになっていたらと思うと誰かが、もしくは何らかの機関が関わってくれているだろうかと考えてしまう。その後の追跡調査も必要なのではないかと感じた。

今問題がないと思われる生徒もたくさんのストレスを抱え、発信できずにいる状況を目にする。そのストレス発散が、学校でいじめる側になったり、問題行動につながっていると感じたこともある。不登校がいじめだけでなく、家庭問題や本人の障がいなど複雑に関係していて、不登校が長期間でなく時々だった場合はいじめ問題を軽く扱っていると感じた保護者からの相談があった。そういったときは報告義務がなく、問題がすり替わっていないかと危惧している。密接に関係している不登校といじめは周りの先生や保護者、子どもたちがいじめは全て重大な事と考えて家庭と学校が協力し、いじめをなくすように教育していかなければと思う。ちょっとした友だち同士の話の中での摩擦、学校に行きたくないと感じることは誰も学校生活の中であると思う。しかし子どもたちは、大人以上に友だちや先生との関係にすごくストレスを感じ、敏感になっていることを大人自身も自覚してあげ、そして早期に介入していかなければいけないと感じている。

話ができる関係づくりがなければ溝は深くなっていく。いじめに繋がる前に小さな問題から対処していく。先生だけで対応して、うまくいかない場合は第三者であるカウンセラーやソーシャルワーカーを活用して欲しい。先生方は授業もあり、多くの生徒を抱えている。いじめにつながる問題の原因が協力体制を得られない家庭や何らかの問題を抱えた家庭の場合もあるので、学校では限られた時間で問題解決に当たらなければならない。そこに先生の代わりに動くことのできるソーシャルワーカーを活用することで子どもたちとの関係を壊さず、学校と家庭の問題に対して円滑に取り組んでいけるように動いてもらえたら先生方の負担が少なくなるのではと思う。高等学校であれば、問題を抱える生徒が、中途退学しても卒業しても次の機関につながられていければ、一人でも社会から置き去りにされるような大人がなくなるのではと考えている。

いじめがあったときは、小さな問題もすべて記録に残して欲しい。幼稚園、小学校、中学校、高校とその記録を必ず進学していく学校へ繋げていくことが必要なのではと思う。いじめ発見

のチェックリスト、アンケート結果は学校にとって必要と思うが、今後対応していくためにも統一された記録用紙的なものを作成して、その学校だけでなく一連の学校教育すべての中で対象になる子どもたちを支援していくような手立てになるのではと考えている。

【事務局】

不登校になった原因でいじめはどれくらいあるかという質問について、調査における選択肢が20足らずである。その中に「いじめ」というものがあり、複数回答可能となっている。小中学校で13件いじめがきっかけとして不登校になった児童がいるが、多いのは(資料1)にあるようなもののようなものである。

【会長】

その後の調査といったものはあるか。

【事務局】

この調査にはない。

【会長】

不登校の調査もそうであるが、詳細はわからない。教師が考えられる状況ということで最も近似的なところにチェックする形であるため保護者が思っているのと学校が思っているのでは違う。あくまで統計であるから該当項目を入れなければならない。その他を選ぶことがあるかもしれない。またいじめが不登校の原因かどうかについてはわからないというのが数字に表れにくいのではないかと思う。

【委員】

私たちの団体にコンタクトを取ってこられる方はいじめ、不登校、また不登校から引きこもりになって、引きこもりからニートになって、さらに煮詰まって生きていけない状態で死にたいというような方が印象に残る。活動し始めた頃は現場のいろいろな問題が多かったが、最近是非常に深刻な状況で、きつい表現で「死ぬ」と訴えてくる。メールとかで入ってくる文章では非常に激しいものがある。私たちが感じていることは子どもたちは被害者であって、大人に問題があるのではないかと思う。大人が大人のことを考えなくてはいけないのではないかというのが正直な気持ちである。問題が深く根を張っていく人というのは家庭環境に恵まれていない。それをもっと掘り下げたら人生観になると思う。

昨日、テレビで滋賀県が書道教育に力を入れているという番組をしていた。その中で、なるほどと思ったのは今の学校、家庭は評価の基準が上中下と分類してしまう。それぞれの持ち味を引き出すということを建前では言っても、実際には取った点で並べる一番簡単な方法を取っている。そんな中から、問題が煮詰まってくる人たちというのは、否定的な見方、考え方、関わり方の中で育った人たちである。我々が感じなくてはならないのは肯定的に書道教育で一人一人の持ち味を評価するという価値観や考え方が家庭や教育現場でもう少し用いられたら、先ほどの話にもあった楽しい学校にならないといじめはなくなると思う。

ある大学の先生が、ビルの4階から上に住んでいる子は体力的にも対人関係にしても弱いという。そのことを考えたときに、地に足をつけて育った大地の子。自然の中でたくましく、体力をつけて育った子どもとテレビとゲームで育った子に差は出てくると思う。泥んこになって自然の中で生きていく中でいじめも経験し、嫌なことも学習していく。経験は不可欠であるから肯定的な関心を我々大人が持たなければならない。上中下の分類をしたのでは解決にならない。希望的肯定的な関心を持って見つめ関わっていくことをやっていかなければならない。

大人社会のいじめも特に女性のいじめも陰湿で執拗なものもあるが、根っこは肯定的な関心を持って育てる教育的価値感だと感じる。滋賀の書道教育のような肯定的な見方、関わり方を捉え導入していかないと次に進まないのではないかと思う。

【会長】

滋賀の書道の審査基準はぜんぜん違うと聞く。きれいな楷書体が入賞するイメージだが、滋賀は芸術的な字が入選、特選を取る。これを何十年も続けている。学校もそんな評価法をとっているとされる。子どもも自由に書く。小筆を使ったり、ハケを使ったりする。だからといって滋賀の書道のレベルが低いかといえばそうではなく、高校の全日本のレベルでは上位である。そういう視点から取り組んでいる。物事というものは決まったものではなく。このような価値観を作っていかなければいけないのかもしれないという問題提起であった。

【委員】

我々が作っている社会を真剣に考えていかなくてはいけない。時間はかかると思うが根本解決にならない。貧富の差が教育格差に現れている。ほったらかしにされている子どもがいる。そういう子が生徒指導上の問題に反映されている。

お年寄りから金を巻き上げ、女性の性被害にしても一方ではそれを金儲けにしたり、欲望のはけ口になっている大人がいっぱいいる。そんな大人が子どもに自立しなさいと言っても説得力が無い。

しかし今の大人を育ててきたのは、我々かもしれない。社会の見直し、いじめの芽が発芽しない土壌。すなわち土作りからしていかないと悲惨な現状を打開できないと思う。そんな悠長なことでは県の行政も待てないと思うが、足元をもう一度しっかり見直す必要性を感じている。対処療法的なパンフレットを作ったり保護者に啓発したりするだけでなく、もう一つの面をしっかりと認識した上で取り組んで欲しい。

【委員】

中学校で学力向上・自立支援員として活動している。学校現場において不登校生徒や高校中退する生徒に関わることも少なくない。

(資料1)にある「いじめ」、「不登校」の数は増えている。私の考えとしては、生徒個人の生活体験の未熟さや耐性の弱さ、心理的身体的な不調からの不登校と、直接いじめが原因での不登校とは少々対応が異なると思う。いじめからの不登校の場合、学校、教員の早期対応で改善される可能性が期待できるが、前者の場合、学校の対応だけでは解決が困難なケースが多くあると考える。

そこで、いったん「いじめ」と「不登校」の問題は切り離して考える。「いじめ」の認知件数であるが、小学生と中学生では発見できる状況は異なる。小学生は自発的な報告があるが、中学生ともなると周りの目を意識し、実際の数が拾い出しにくくなる。そういったことも考慮したうえで、アンケートの取り方を工夫することは必要である。アンケートの回数や内容が学校によって異なること認知数の精度も違ってくる。アンケートを取るだけではダメで、取った後のケアをどうするかというガイドラインを作っておくことで学校側も動きやすくなると思う。

また、Q-Uアンケートの実施について。実際に取り入れている学校から効果効用を聞き取り、いじめの発見に役立つのであれば、積極的に取り入れてみてはどうか。

次に不登校についてである。(資料1)にあるように、中学生の不登校数が非常に多い。この不登校生徒たちの次の進路がわかるような数字があれば知りたい。長期不登校になる生徒の進路保障は、学校と家庭の連携なくしては極めて難しい。不登校生徒の持つ背景として、家庭環境の影響もある。経済的な困難や、保護者の多忙もあると思われる。生徒に関わる中で生徒の気持ちを確認し、進路保障の手立てを個別に行う。こういった手が差し伸べられるチャンスがない生徒は極めて進路保障が難しいのではないかと思われる。実際、この数字に対してどれだけの生徒の進路保障がなされたのかが気になる。

「不登校」の延長線上には「ひきこもり」がある。そこでは、さらに社会的なつながりが薄れ、生徒本人にとっても自立のしにくい状況におかれることへの予測がつく。少しずつ耐性をつけていく訓練や自己表現できるような訓練を学生生活の中で取り入れていくことで、社会とのつながりを維持するきっかけになるのではと考える。

社会福祉士としてできることもある。スクールソーシャルワーカーを活用することで、学校だけで取り組みにくい支援を教員と連携して行うこともできる。小中高の連携も重要である。情報の連携を通して得られる効果もあると感じている。

【事務局】

中学校3年生の不登校生が次どういう進路をとったかという具体的なものはこの調査にはない。進学率からすると多くの者が高校に進学していると思う。ただ、進学後中退するということもあるかもしれない。どれだけの生徒がという数字もわからない。

不登校も30日を超える程度で、怠惰傾向やいじめでということであれば次の進学先で元気にやっていく子もいる。中学も進路を見つけ指導する努力はしているが、進学した後、途絶えてしまう生徒もいると思う。

【会長】

小学校から中学校へ送っていけるカルテのようなものがあればいいとか、追跡調査をされたらとあったが、これはなかなかできない。もしカルテを作ったならカルテそのものが一人歩きしてしまう。個人情報観点、開示請求などがあり、指導要録と同じで難しさがある。時代も変わらなくてはいけないと思うが、個人情報保護の立場もある。本当はそれではいけないと思うが、構造上分けて考える必要はある。学校は保護者から情報を集めるにあたり「他の目的には利用しません」としなければいけない。当然、目的利用後は破棄しなければいけないし、いろいろ気を使うから学校は二の足を踏むことになる。このような状況だからこそ学校と家庭をつなぐ役割を持った人が大事になるのかもしれない。

【委員】

我々が関わる家庭は崩壊しているような家庭が多い。十分な愛情を受けずに育っている児童を見かける。事件を犯したある児童の家はゴミでいっぱいだった。寝るのもゴミの上で寝ている状況だった。小遣いももらっていない中で犯罪を犯してしまった。豊かな社会の中にもこういった家庭もある。

また、母子家庭で育てられた子どもが暴れる。来てくれと言われ行くとその家もゴミがいっぱい。そういった家庭もあった。

また、お父さんから虐待を受けるとか、その家庭の中で暴力に慣れてしまう。DVの認知件数も増えてきており、夫婦間の暴力を見て育った子どもは相手を思いやる気持ちをもてないケースもある。なかなか環境を変えていくことはできないが保護して施設に行くと、どうしてもトラブルを起こしてしまう。そして児童自立支援施設に行くこととなる。職員に対する暴力が出てしまう。

我々は親身になって聞いてあげる。過去の背負ったものを聞いてあげないとなかなか解決していかないと最近感じさせられている。ハートの交流は落ち着いていても難しい生徒もいる。施設でも担当が代わったり、学校の先生も代わったり、一定して関わってくれる大人がいないのも大きい理由でないか。寄り添っていくというのがキーワードになっていく気がしている。

不登校になる原因に、母親のうつ病により「寂しい」と止められて学校に行けない子どももいた。その子は学校に行きたいけれども行けない。そういったケースもある。母親が精神疾患で立ち入り調査といったこともあり大騒ぎになって子どもを会わせてくれる。児童相談所という職権でなければできないということもある。

いじめの問題で津市の越市長さんの本を読んでもプロレスごっこも客観的に見るといじめであると気づく。自分たちで学べる環境を作っていくと、子どもたちの意識が変わっていくのではと思う。

【委員】

上の子は今年成人で高校は皆勤賞で登校した。下の子は高2で、高1の時にコミュニケーションをとっていたがおなかが痛いと言って休んだことがあった。

その夜は話しかけても返事もせずスマホを見ていた。私としては熱もないのにどうしてだろうと思っていた。大事に育ててきた子どもなのに甘やかしてきたのかなと自分の育て方を考えていた。もしかすると乗り越えられないようなことでもないが、休んでしまえで休んでしまったのではないかと思った。親が行けと言っても先生が来い来いと言ってもこの子は誰にも相談せず自分の壁を自分で越えたいと思った。夕方に先生から電話があったときに「もしかすると明日もこんな状況が続くかもしれないけど、この子は自分で立ち直ると思うので見守ってください」と言った。夕飯ごろになったら「やってしまった」と言って部屋から出てきた。「あした学校に行かなあかんから」といった表情を見て嬉しかった。彼女の中で何かを越えたのかなと感じた。私も娘を信じきれたことで温かい一日になった。

不登校って他人事と思っていたのにそうでもないと感じた出来事であった。

PTA役員ということで、弁護士の先生の話の聞いたり、少年鑑別所の施設見学に行ったりする機会に恵まれた。鑑別所では16歳から18歳までの少年が多く入所しており、職員の方の優しさにも驚かされた。4週間から8週間ぐらい心を落ち着かせて心理状態や原因などを調査するらしいのだが、規則正しい生活の中で特別な講義などもない生活をする。職員の方が「この子たちは加害者ですが被害者でもあるんです」と言っていた。先ほど家庭環境の要因は大きいと言っていたが、やはり家庭かと思った。放任、過干渉どっちにしても愛情がわかっていない子と言っていた。周りに認めてくれる大人がいれば違ったかもしれないと言っていた。愛情をかけた子育てをしなければ難しいと実感した。

鑑別所では、問題を起こした子どもや家族の相談だけと思われがちだが、思春期の子が問題を持っている子どもの相談も受けていると言っていた。そんな知識も知っていることは大事かと思った。

【委員】

スクールカウンセラーの立場で、不登校問題について話をしたい。生徒や保護者向けに「スクールカウンセラー便り」を発行していて、4月には中1ギャップを取り上げてみた。

岡山県が中学生に「中学校生活での驚きや戸惑い」についてアンケートしたところ、1位が「テストが一度に沢山あること。成績がはっきり示されること」、2位が「授業が難しいこと、1度に習う量が多いこと」、3位が「上下関係が厳しいこと」、4位が「友だちとよい関係でいること」、5位が「決まりやルールが厳しいこと」、6位が「勉強や部活動が忙しく、ゆっくり休めないこと」という結果だった。

徳島でも、同じようなことに戸惑っている子どもや保護者がいる。成績評価については、小学校はあいまいで、中学校の入学テストで初めて順位がつく。中間テスト、期末テスト、実力テストで順位のついた成績を示される。学校を休みがちな生徒の保護者と面談をしたときに、保護者が「勉強のことで悩んでいると思う」と言っていた。「中学校に入るまで、こんなに成績が悪いとは思わなかった」と言う保護者もいた。

小・中のギャップを無くすためには、小学校高学年では、もう少しはっきりした成績評価を取り入れても良いのではないかと思う。中学での成績表を見て、親は勉強、勉強と口うるさく言うようになり、進学の際の内申を気にして部活動も勧める。授業を終えて、遅くなるまで部活動し、その後塾に行く。子どもたちが疲れてくるのは当然だと思う。帰宅して、食事をして、テレビを見たり、スマホをしたりしていると、就寝時間も遅くなり、生活は不規則になって、朝からなかなか起きられない。休日でも対外試合がある部活動もあり、生徒も先生も疲れきっている。このような生活を見ていると、ストレスを感じていない子は少ないと感じる。このことがいじめや不登校につながってくる。

文科省が20歳になった、かつて不登校であった人にアンケートをとったところ、一番多かった理由が「無気力」で「体調、ぼんやりとした不安」、「いやがらせやいじめをする生徒の存在、友人との関係」、「朝起きられないなど生活の乱れ」、「勉強」と続く。

勉強、勉強という価値観をどうにかしなくては、という意見があったが、高校では、国公立合格何人というのを競い合っている現状があって、子どもたちは翻弄されている気がする。現状のままでは、子どもも家庭も厳しい状態に置かれているので、小・中のギャップを埋めていくことが必要だと思う。

【委員】

この調査結果においては、当事者はもちろん、各学校、担任、保護者と捉え方が違うし、調査の仕方が異なると思うので、認知件数というのが果たして正確な数字なのかと少し疑問

に思った。ただ、認知件数が全国平均より少なくなっているのは喜ばしい結果だと思う。今後、もう少し客観的な結果を得られるようにするために、県下統一のアンケート項目に各学校での課題になっている項目を加えたアンケートを実施するのもいいのではないかと思う。ブルースごっこもいじめになるんだと生徒が気がつくような項目を入れたり、ショートホームルームの5分ぐらいの短時間で済ますのではなく、生徒たちが心の叫びや気づいたことを書けるような時間を与えるなど、配慮をしたアンケートでなければいけないと思う。隣の子が書き終わったことにより、書きたいけど書けないというような状況があるのでは正確な調査ができないと思う。答えている間に、これもいじめだったんだとか、自分はこんなことをしていたと気づけるようなアンケート項目を入れるといいのではないかと思う。

(資料1)のいじめの解消状況で、高校は100%となっているが、どういう状況をもって解消したと判断したのかと思う。年度内に解決するようなものでないと思う。私に関わったものでは、連日の調査とか、特別指導とか、謝罪とか、ある程度の時間が経過すると、加害者という子も、被害者と訴えてきた子どもも、担任も、関わったすべての人たちが疲れ果てて、早くこの件から逃れたいと思うようになり、表面的には解消されたようになったケースがあったと記憶している。高校生になると、仲良くしましうだけでは解消しない。一切関わらないという状況ができた段階で、解消したような形になっている場合が多いのではないかと思う。

いじめについては、以前にも言ったが、小さいときからいじめをしない土壌をつくる、防止の前の土壌をつくるのが一番大事だと思う。

不登校に関しては、高校にももちろんあるが、本校では、経済的な理由とか、学力のギャップとか、発達障がいなどがきっかけになる場合が多い。学校では組織的に支援しているが十分ではないので、スクールカウンセラーなどから専門的なアドバイスをいただく機会がもっとほしい。長年の私たちの経験から、この子は発達障がいかもしれないと思っても、専門家でないので伝えることができない。判明したときに、保護者の方は、小中学校の時から発達障がいでないかと思っていたが認めたくなかったというようなことをおっしゃる場合が多い。

中途退学については、2年間はいつでも復学できるし、それ以降もあなたにとっての学校は居場所の一つであり、全面的に支援することを伝えている。その後も担任を通じて定期的に連絡をとり、状況をチェックしながら、アドバイスしている。本校では、ひきこもりの生徒はほとんどおらず、休学中の生徒は次の学校や大学検定に向けての準備をしている場合が多い。また、1年間休学した子の中には、後になって休学期間は自分を見直す良い時間になったという生徒もいた。

違いを認めてお互いを尊敬する教育というのが大事だと思う。特に、小さいときの愛情の面であったり、環境の面であったりというのが先程も出てきたが、少なくとも学校に来たら大切にしてもらえる。学校が一番楽しいという学校づくりを進めなくてはいけないと思った。

昨日インターネットで、徳島県は何が1位なんだろうと調べたところ、糖尿病はもちろん、生徒の人数に対する通塾率のパーセントが1位と出てきた。本校は進学校なので、生徒は朝早くから補習に参加し、授業が終わると部活、その後塾に行き、家には11時頃帰るということを繰り返している生徒もいる。ストレスフルな毎日だが、それを上手くこなしている者もいれば、いっぱいいっぱい心で余裕がなく、他人のことを思いやれない者もいる。ただ、いじめなどはいつか自分に返ってくるのがわかっているのではないが、精神的なゆとりはあまりないように感じる。

【委員】

いじめを発生させないことはもちろんだが、保護者の家庭環境も含めて考えて行かなければいけないかなと思う。ただ一点痛切に感じるのは、個人情報保護の関係でいろいろな対応をするにも家庭環境、格差さえもこちらが把握できない。そういった意味で対応が難しい。時代の要請ゆえ泣き言を言っても仕方がないが、この審議会や各機関との連携で新たな対応を考えて行かなければいけない。昔と違う対応を考えていかなければいけない。

スマートフォン等によるいじめの関係で当方、美馬地区と阿波吉野川地区で中学校校長会の協力を得て今年「中学サミット」と銘を打ってスマートフォンの使い方を生徒に話をする機会を2箇所で行うこととしている。またこのことについて各生徒の意見などを報告できればと考えている。

【会長】

最後に副会長にまとめていただきたい。

【副会長】

自分の意見を言う。委員の皆様の意見に明るいものを感じながら聞いていた。今朝のニュースで22歳の女性に対し、25歳の女性とその母。そしてその女性の夫らが監禁暴行した事件を見た。25歳の女性には3人の子どもがおり一緒に住んでいる。ずっと暴行しているのを見てこの子どもたちはどうなるんだろうと思った。人には暴行してもいいんだということを学んでしまったのではないかと思った。いろいろな事件を見ていると大人社会が変わっていかないといけないと思わされる。しかし私たちが大人社会を変えるというのはとても遠い話かも

しれない。そこでまず何ができるかを考える。先生たちのストレスが多いのであれば、そのストレスを軽減できないかなと思った。先生たちも楽しく生徒指導をする。先生たちも楽しく学校に行くことができ、お互いをサポートしながら生徒たちと関わる。そこから生徒たちも楽しくなって学校に行けるようになる。保護者の方も先生方に相談できるようになるのではないかなと思う。

スクールカウンセラーが「いじめ」「不登校」「発達障がい」などの生徒と相談したことを先生方に伝えたくても、先生方は忙しく伝える時間がとれない。放課後になっても忙しい先生は部活に行ったりするので帰ってからになってしまう。夜、携帯電話に連絡したりすることもある。そうになると保護者と話すのはもっと遅くなり、遅い時間に家庭訪問するのもいろいろ配慮が必要となる。これをなんとかできないかと考えている。精神的ゆとりを持って先生方がいろいろ対応できればと思う。

連携の話もいくつか出てきて、小学校では学校に行けなかった子が、リセットされて中学校からは行けるようになった生徒さんの話もあったが、中学校では部活だったり、友だちだったり、対人関係に悩まされる。対人関係を作るために小学校の時から切磋琢磨することやライバルと戦うこと等か、ソーシャルスキル向上や人との距離の取り方、接触の仕方を学ぶことになる。

不登校になってしまった場合には適応指導教室等に行ける子どもはまだいいと思う。適応指導教室でまた対人関係を学ぶことができるからである。そのために適応指導教室を更に充実するような財政面や人材は必要となる。通えない場合は社会福祉士やスクールカウンセラーなどの訪問で対応することもできる。大人との対人関係になるが、そこからスタートしていければいいと思う。

不登校の生徒と関わっていて一番難しいのは、不登校解消に親が協力的でない、積極的でない場合である。保護者が精神疾患という場合もあるし、多忙という場合もある。また学校に対する不信感を持っていたり、行かなくていいと思っていたり、話したいといっても受け入れてくれなかったりする場合もある。そうなる前に親との関係をよくしておきたい。先生と話をする機会を増やしておきたい。

子どもが甘えるのも大切だということで、小さいときから自尊感情を育てる必要がある。自分で解決する力も育てたり、レジリエンス教育をすすめたりしているが、レジリエンスが弱い子どもも多く、ちょっとしたことでコケてしまって立ち上がれない。親や他の大人が手を出してしまうので、そこで手を出さずに子どもに立ち上がってもらうためにどんな力があればいいのかといった調査。家庭の絆であったり、信頼できる人の存在であったり、そういった人がいるとないでは違うという結果もでていたので、先生方も家庭や学校がうまく機能していないのであれば、その代わりになるようなスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの役割も理解しておいて欲しい。スクールカウンセラーも小学校や高校にももっと行きたいと思うし、配置できたらと思った。

身体的ないじめ、言語的ないじめや無視等あるが、最近注目されているのは性的ないじめである。例えば服を脱がして写真を撮ってとか、彼氏彼女でつきあっていた頃、キスをしていた写真を別れた後ばらまく等がある。ちょっと違うがLGBTといったセクシャルマイノリティの方を傷つけるいじめがある。自分の在り方を否定される言動により学校に行きにくくなり不登校になる場合もある。こういったケースは学校では把握し難い。このあたりも今後、取り組む必要性が出てくると思う。

【会長】

年初めということで多くの意見を聞くことができた。また施策に反映していただければと思う。